市立根室病院における

脳神経内科診療体制構築に関する研究

院内説明・研究実施承認および倫理審査申請に向けた概要資料 ver1.1

作成日：2026年10月8日

1. 本研究の趣旨

本研究は、2023年1月以降、市立根室病院において構築してきた脳神経内科診療体制を、診療実績、地域医療連携、専門治療の導入、患者の通院負担、患者・医療者教育等の観点から客観的に検証する後方視的観察研究である。

目的は個人または診療科の業績を示すことではなく、専門医療資源が限られた遠隔地域に常勤脳神経内科医を配置し、高次医療機関との双方向連携を組み合わせる医療提供モデルが、地域住民の専門医療へのアクセスにどのような変化をもたらしたかを明らかにし、今後の根室地域の医療体制整備に還元することである。

2. 研究の背景

根室地域は北海道東部に位置し、都市部から遠隔にあることに加え、人口減少、高齢化、医師不足という課題を抱えている。北海道の医療計画においても根室圏域は医師少数区域とされ、専門医療へのアクセス確保は地域医療上の重要な課題である。

脳神経内科領域には、Parkinson病、認知症等の頻度の高い疾患に加え、多発性硬化症（MS）、視神経脊髄炎スペクトラム障害（NMOSD）、MOG抗体関連疾患（MOGAD）、重症筋無力症（MG）、慢性炎症性脱髄性多発根ニューロパチー（CIDP）など、専門的診断と長期的な疾患特異的治療を必要とする疾患が含まれる。

市立根室病院では2023年1月から常勤の脳神経内科医による診療を開始し、専門外来の整備、神経疾患に対する標準的・疾患特異的治療の導入、近隣地域の、脳神経内科専門医が複数名常勤し、より専門的な検査・診断・治療が可能な医療機関（以下、連携専門医療機関）との医療連携、患者・市民への疾患啓発、院内外の医療従事者への教育活動を進めてきた。

3. 研究目的

1. 地域住民の脳神経内科専門診療へのアクセスが、専門医赴任後にどのように変化したかを明らかにする。

2. 根室地域内で診断· 治療· 継続管理できる神経疾患および疾患特異的治療の範囲がどのように変化したかを明らかにする。

3. 市立根室病院と連携専門医療機関との紹介· 逆紹介による双方向の地域医療連携がどの程度構築さ

れたかを評価する。

4. 専門医配置によって、患者の地域外医療機関への受診回数、移動距離・移動時間等の通院負担がどの程度軽減された可能性があるかを評価する。

5. 患者・市民および医療従事者に対する教育・啓発活動の実績を体系的に記録する。

4. 研究デザインと対象期間

研究デザイン：後方視的観察研究（retrospective pre-post health services study）

主解析期間：2023年1月1日～2026年12月31日

赴任前比較期間：可能な範囲で2020年1月1日～2022年12月31日

介入点：2023年1月、常勤脳神経内科医による診療開始

使用情報：電子カルテ、診療統計、紹介・逆紹介記録、教育・講演活動記録等の既存情報

患者への追加介入：なし。研究目的の新たな検査、採血、投薬、受診は行わない。

5. 主な調査項目

・脳神経内科の新患数、実患者数、外来診療数

・患者背景：年齢、性別、居住地域

・疾患構成：Parkinson病、MS、NMOSD、MOGAD、MG、CIDP、認知症、てんかん等

・根室で新規導入または継続可能となった疾患特異的治療

・紹介元・紹介先、市立根室病院から連携専門医療機関への紹介数

・専門施設で診断・評価後、市立根室病院へ逆紹介され継続診療となった患者数

・専門医配置前後の地域外医療機関への通院状況

・可能な場合：回避された地域外受診回数、推定移動距離、推定移動時間

・患者向けセミナー、根室保健所との合同講習会、院内勉強会、地域講演等の開催実績と参加人数

6. 本研究によって明らかにしたいこと

本研究の中心的な問いは、「専門医療資源の限られた遠隔地域に常勤脳神経内科医を配置し、高次医療機関との双方向連携を構築することによって、患者が居住地域で受けられる専門的神経診療をどこまで拡大できるのか」である。

特に、市立根室病院で日常的な専門診療を行い、より専門的な検査・診断・治療を必要とする患者を連携専門医療機関へ紹介し、専門的な評価・治療後、地域での継続診療が可能な患者は市立根室病院へ逆紹介して管理するという双方向のshared-care modelが実際に機能するかを検証する。

また、良好な成果だけを示すのではなく、専門医配置後にも地域外医療機関への依存が残った領域、新たに顕在化した需要、診療体制上の課題についても明らかにする。

7. 本研究の意義

① 患者にとっての意義：専門医療を受けるための長距離移動を減らし、居住地域で継続的な専門診療を受けられる可能性を客観的に評価できる。

② 市立根室病院にとっての意義：専門医配置によって地域内で提供可能となった医療を可視化し、今後の診療体制、医師・スタッフ確保、設備・連携体制を検討する基礎資料となる。

③ 地域医療連携上の意義：すべての高度医療機能を地域内に整備するのではなく、根室地域と連携専門医療機関が機能分担する持続可能な専門医療モデルの有効性と課題を検討できる。

④ 北海道・全国への意義：医師偏在や専門医不足を抱える他の遠隔地域において、専門医配置と地域間連携をどのように組み合わせるべきかを考える実証的資料となり得る。

⑤ 学術的意義：rural/remote neurologyにおけるhealth-services researchとして、専門医配置によるアクセス、治療提供、shared care、travel burdenの変化を定量的に示すことを目指す。

8. 患者への負担・個人情報保護

本研究は既存の診療情報等を用いる後方視的観察研究であり、研究目的の追加検査・治療等は行わない。研究用データは研究IDを用いて管理し、氏名、住所、診察券番号等の個人を直接特定できる情報は解析用データセットに含めない。

学会・論文等で研究成果を公表する場合も、個々の患者が特定されない集計データとして提示する。研究の実施は、市立根室病院の規定および研究開始時点で適用される「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に従い、倫理審査委員会の承認を得た上で開始する。情報公開・オプトアウト等の具体的手続も倫理審査委員会および施設規定に従う。

9. 期待される成果と研究成果の還元

本研究により、根室地域における脳神経内科診療の現状と変化を体系的に記録し、専門医配置による効果と残された課題を定量的に提示することを目指す。結果は院内に還元し、今後の診療体制・地域連携の改善に利用する。

研究成果は日本神経学会学術大会で発表し、その後、国際的な英語原著論文として公表することを計画する。第一投稿候補を Neurology: Clinical Practice、第二投稿候補を Rural and Remote Health とし、根室固有の経験にとどめず、同様の課題を持つ国内外のremote/rural communityで参考となる医療提供モデルとして発信する。

10. 院内で本研究を実施する意義—要約

本研究は、「2023年以降、根室の脳神経内科医療で何が変わったのか」を既存の診療データから客観的に検証するものである。

専門医配置によって得られた成果だけでなく、改善しなかった点や今後必要となる医療資源も明らかにする。その結果を患者、病院、地域医療機関へ還元し、根室地域で持続可能な脳神経内科診療を構築するための基礎資料とすることが、本研究の最も重要な意義である。

11. 本研究の最終的な問い

「専門医療資源の限られた遠隔地域に常勤脳神経内科医を配置し、高次医療機関との双方向連携を構築することによって、患者が居住地域で受けられる専門的神経診療をどこまで拡大できるのか。」

この問いを実際の診療データから検証し、根室地域の今後の医療に還元するとともに、同様の課題を抱える他地域にも共有することを本研究の目的とする。